

## ～さっぼろ・消えた町かど～

朝倉賢(日本放送作家協会北海道支部長)

### 自然の音が聞きたくて

今年の春は遅ればせだった。手稲山の雪どけと一緒に郭公(カッコウ)の鳴き声が届くのを、今年も待っていたのだが、とうとう聞けずに終わりそうな気配だ。

郭公という鳥は雪解け前線を追いかけるようにやって来て、北国の春を一番先に教えてくれる鳥だから、何年か前までは郭公の発泣きをいつ聞けるかが、クイズになったりニュースになったりしたものだったが、札幌にはもうこの鳥は来なくなったのだろうか。

飛来しなくなった鳥に燕(ツバメ)もいる。

私が少年の頃、というのは半世紀以上も昔ということだが、我が家の玄関の天井に燕が巣をつくり、ヒナを育てていたことがある。親燕はつがいので暇なく餌を巣に運ぶ。夜明けを待つように小虫を探しに飛び立つから、日中も早朝も玄関の戸を閉めるわけにはゆかない。それでもわが家では泥棒の心配するわけでもなく、巣立ちをずっと見守り続けたものだった。

-----こんな渡り鳥たちの訪れがなくなった今、町を占拠しているのは烏(カラス)だろうか。でもこいつは、ゴミを食い荒らし、電線に巣作りして停電を呼び、時には老人に襲いかかるなどなどどうも評判が悪い。烏の跳梁のすき間を縫って、鳩(ハト)が公園に群がっているが、これも平和のシンボルなどと云われたのは昔のこと、フン害が多く「餌をやらないで」と今は閉め出しの最中だ。

鶏(ニワトリ)の声で目を覚まし、鳥が一斉に森へ帰る鳴き声で、外遊びをやめる、といった子供の頃の自然の声との共存はどうやらすっかり消えたようだ。

だから、晴れた日は車で郊外へ出たくなる。野の音を聞きたくなる。連休の直後、ルスツでは見事な鶯(ウグイス)の声をきいたし、神宮の大祭前に、由仁ではあきれれるほど沢山の蝉(セミ)が鳴いていた。

車の効用である。